

# 第 10 回研究会より

参加者 9 人+森田智幸（山形大学講師）先生

会場：新庄中学校 図書室

白鷹町から川田さんが新規に参加し、他の会員の方にご紹介して会がはじまりました。

今回は、カメラを忘れてしまって画像がありませんが、森田先生のお持ちになった授業を 1 本みて、その授業についてじっくり議論をしました。その後、今年度おのおのが“学び合い”を実践してきたの課題やわからなさなどをテーマに森田先生のアドバイスをいただきました。いつもにまして大変有意義な会となりました。

特に私が学んだと思ったいくつかのポイントについてご報告します。

## ☆1 A 小学校の授業カンファレンス

小学 2 年 算数

課題	赤組の玉の数は、全部で 34 個あります。 白組の玉の数はわかりません。 赤組の玉の数は、白組の玉の数より 6 個多いです。 白組の玉の数は全部でいくつありますか。
----	---

子どもたちの机の上には教科書は載っていません。筆入れだけがあります。座席の隊形はコ字。

教師は、最初に上記の課題を黒板に書いて、斉唱させます。その後、この課題を「式を使わないで、図や表を描いて考えるように」と指示を出して、プリントを渡します。

ビデオを見た参加者の全員の驚きは、ペア学習で、とにかく活発に学びあっていることでした。

「わかんないよ」

「理由いって」

など、ペアでの話し合いの作法があちらこちらで発揮されています。子どもたちの学び方の姿勢が本当にやわらかいという点は、その後の議論の話題にもなりました。

この課題の面白さは、課題文にある“より”“多い”という言葉から、はじめ足し算をして、白組の数を 40 と考える子どもが半数以上でている点でした。

言葉から式がひっぱられる強さを感じました。教師の指示は、図や表から考えて

なのですが、子どもたちは、課題分の文字からの影響が強いのです。ただそれを利用して、そこにずれを作る課題だったようです。

途中、隣同士の Aさんと Bさんの考えが出されます。Aさんの答えは 40、Bさんの答えは 28。どちらの考えが正しいのか考えさせます。話し合いを通して、28の答えが多くなっていくのですが、Aさんは頑として 40。

そこで再びペア学習。音声拾えていないので、Bさんと Aさんのやりとりはわからないのですが、Bさんからの説明を聞きながら、ぱっと Aさんの表情が変わります。「わかった」と言ったときのあの表情は、あんなにもはっきりわかるものかと思うくらいでした。Bさんは、後ろの子どもに「ねえ、Aくんわかったって」と、話をしています。

TTで行っている授業で、T2が一箇所発言しました。「〇〇くんが、〇〇さんの言葉を言い換えていることがすごいと思いました。」T2は、多くの教室で見られるように、落ちそうな子ども一人ひとりにひとつひとつ対応していることはほとんどありませんでした。違う対応で接しているようです。

その後授業は、教師が黒板にテープ図を描いてそれを使って、一人ひとりがプリントの課題を行って、できたら教師にちえっくしてもらおう活動に入っていました。

### 【 協議より 】

- ・ どうして、小学 2年があんなに活発にペア学習ができるようになったのだろう？

→森田先生から、このクラスの子どもの背景などの紹介があり、小学 1年のときの座席の配置の映像をみせていただきました。教師の周りに机がぴったりとふつつきあって密着している隊形。子どもが「ハイ！ハイ！」となるのは、教師からの距離が遠いから、だから 1年のときは密着。それから 2年 3年と少しずつ距離をとっていつている。これは、そのクラスのベテランの先生が経験則で学んできたものだった。

- ・ テープ図で考えるときの時間帯も、ペア学習で行わせたかった。
- ・ あの課題にすると、小 2の子どもはあのようなずれ（足し算にする）を生むのか？

→豊岡さんから、あの課題は、小 2にとってはビデオの子どもと同じようなズレを生みやすいということを経験から話をしてもらった。こどもにとっては難易度の高い課題になっていること

- ・ 教師が図や絵で考えてといつているのに、やはり子どもは式にしようとしていた。

→高橋晋から、図や絵で考えるということやあの課題文を見ると、どんぐり倶楽

部（糸山泰造氏）の考えかなという思いもあった。言葉から立式するパターンが出来上がっていて、中学1年には、1年間、このどんぐり倶楽部の宿題を行ったことを紹介した。どんぐり倶楽部や視考力についての詳細は、下記のアドレスをクリックしてください。

- ・ T2の先生が、よくみる対応と違う。「子どもの学びでよい点を全体に紹介していた」

→森田先生から、落ちそうな子を一人ひとり対応しても追いつかないことに、もう気づいているから。

- ・ あんなに活発にペアでの学び合いが行われていると、教師は、教室で起きているすべて学びを見ることは難しいのではないか

→森田先生から。むしろ逆で、これまでのような一斉指導の方が、一人ひとりの学びの姿をとらえるのは難しいはず。むしろ子どもに課題を投げて学び合いをするほうが、実はよく見えるようになる。だから、あの先生は、Aさんの発言を全体で紹介している。

- ・ 20人前後のクラスだが、TTで入っているのは、市の支援員なのか

→森田先生から。あのT2の先生は、講師ではなく教諭である。たぶん、生徒指導の加配で増員されている

見るたびに考える切り口がたくさんある、魅力いっぱいのビデオでした。

## ☆2 学びの共同体づくりでの質疑応答

- ・ ジャンプの課題について、必ず質問される。どのようなイメージなのか教えて欲しい。

→（森田先生）ジャンプとは「できそうで、できない」という課題レベルだが、例えば先日みた英語の授業。後置修飾の授業だったが、後置修飾を使って5つの文をつくるという課題。あの課題はとっても具合がちょうどよくて、3つまでは何とか出るが、5つまでだとなかなか難しい。このように、量で難易度を作ることは英語などではできそう。

→（川田さん）以前、事前検討会などでは、「この難易度は難しいから、みんなができる難易度にさげるように」言われることがあった。

→（豊岡さん）全員ができる課題設定に学校での話し合いにはなってしまう、課題を難しさをあげることに否定的なところがある

→ (森田先生) 今回の英語の授業の協議会でもあった。5 つは難しかったので、3 つにすればよかったのではという考え。でもあれは違って、5 つの課題だから、3 つ出てきた。このように課題が高いから、なんとかがんばろうとして引きあがった。

また、戻るものがあるというのが、ジャンプの課題づくりのヒントになる。例えば歴史などでは、以前学んだことが、考えるときに戻れる場所となっている課題とか。先ほど話しをした英語の授業でも、文を作る中で、『3 人称単数の S』とか『大文字の表記にするのはどういうときか』とか『着るという単語は **put on** か **wear** か』というような、課題を通して、これまでの学びに再び出会っていく。これも戻る場所がいくつかあるということ。これがないと、このときだけしか使えない学びになってしまい、課題としては、できる子とできない子が完全に切り離されてしまう。数学の「平行四辺形の面積の公式を使えるようになる」課題があった。あれなんか、子どもは長方形で考えようとするんだけど、本当は三角形で考えるところ。そう考えると、課題は「平行四辺形の面積の公式を使えるようになる」ではなくて、「三角形の便利さを知る」がよかった。たて×よこは、全部、底辺×高さという認識に立てば応用範囲が広がる。なによりも、三角形の面積の公式という戻れる場所を作ることができることで、子どもはいろいろな幾何学的な模様にも挑戦できる。

→ (浅井さん) 台形の面積公式がなくなったのは、あまりにも公式が複雑だったから。でも、台形の面積を求める課題こそが、これまでの公式を駆使して思考することができた。

→ (高橋明さん) 昨日まで静岡で授業研をみてきたが、社会の木簡を使った授業。先生が木簡をつくってきて、生徒がそれをみて考える。課題は「木簡からその当時の生活を学ぼう」木簡に書かれている文字などを発見しながら、鮑とかいろいろな漢字をみつけていたり、ここは手紙の住所みたいなものではないかと学び合いで見つけていたりしていった。でも生徒にありったけ 30 分くらい使って学び合いをさせた後、いきなり「この当時の農民の生活はどのようなものだろう」と先生は違う課題をだしたのに、え? となった。自分なら、一度、最初の課題のまとめをする。それでもその先生はしないどころか、次の課題でも、生徒に考えさせて「えーそうなの、本当か?」で授業が終わった。でも佐藤学先生の話を聞きながら、わかったのは、この先生はわざとまとめをしなかったということだった。たぶん次時に、今日の授業などを戻る場所にしながら、新しい課題にするのかもしれない。

→ (森田先生) ひし形の公式はこれ、平行四辺形はこれ、というような課題の提示は意味がない。限られた中でしか使えない。もっと概念まで深くほりさげて課題をつくらないといけない。テストの穴埋め問題なんかみると、あれ逆だなと感

じる。穴埋めに入れるものを考えるのではなく、穴埋めに入れる言葉などを使って、説明できるようにすることが大切。だから、この語とこの語を使って説明しなさいとする問題ならわかるが、数学の証明なんかも、穴埋めになっている。テストの作り方にも、どんな力をみたいのかが出ていない。

→ (山本さん) 浅井さんの授業をみて勉強になったことがある。授業開始の漢字テストで、浅井さんのは、穴埋めを使わない。例えば、先生が「野球部が勝つ」と文章で話して、それを生徒が漢字にしていく。確かに、これまでの穴あき問題だと、そこしか使えないが、浅井さんのやり方なら、いろいろなところでも使えるものになっていく。

→ (森田先生) 課題を作るのというのは、新しい課題を提示するというのではなくて、ある島とある島を結びつけるようなイメージ。クレイティブな作業も同じ。創造するのは、まるっきり新しいものを作るというよりも、あるものとあるもの間を結ぶこと。make mean という英語はうまいとおもう。意味をつくる場所に、ジャンプの課題が生まれる。これまで習った島と島を、つなぐこと。戻れる場所や戻れる知識などは、なるべく遠いほうがよい。前の授業のものなどは、近すぎて、この課題のつくりは、学力は階段上になっているという考えになってしまう。ジャンプの課題づくりは、その課題を支えている概念を掴むこと。生徒の思考を予想するのは違う。あくまでも課題の本質を知り、その本質となっている概念をこどもに何度も出会わせるもの、それを考えるのが『ジャンプの課題のデザイン』

・ (笹原さん) コの字隊形の意味は何だろう

→ (森田先生) コの字にするというのは、意味が2つくらいあって、1つは、生徒へのメッセージ。体をやわらかくしていいんだよというメッセージの意味。あとは、仲間と共有しあえる仕掛けがしやすいこと。視線なんかも、意見の共有に必要な手段になっていく。

→この間、生徒会の選挙があったとき、立候補者のひとりが、「今の学び合い」を推し進めたいと、立候補の演説で話したのはうれしかった。

→ (森田先生) それはすごい。生徒の方が、学び合いの授業をしたいと思っている証拠。

・ (川田先生) いまいる学校では、自立解決の考えがよくなるのはいい

→ (高橋) 小学校では特に自立解決をして、その後グループ学習というパターンが出来上がっている。自分はそういう出来上がっている学校には「グループの中で自立解決させて」というようにしている。

→ (森田先生) 佐藤学先生の話で思い出したことがある。ある生徒が振り返りに「合唱したらひとりになれた」と書いたという話。実は、一人でいるときは一人にはなれない時、他者のなかにいるときこそが“自分と出会える”ときになる。

「個人作業の共同化」と言っている。

→ (高橋明さん) 静岡のまえに神奈川の交流している中学校にいった。ここも学び合いを取り入れているが、びっくりしたのは茶髪の中学生やミニスカートの中学生が多くいたこと。でも、授業では、そういう子も支えあって学んでいた。  
→ (森田さん) 外見だけでなく、そのような学びの姿をみるのは教師にとって大切なこと。

ボイスレコーダーもなく、思い出しながらの記録になりましたが、私にとって本当に充実した話し合いでした。共同の学びを進めていて分からない点は、研究をすればするほどでてくるのは当然です。それを、まさに教師自身が学び合いながら解決しようとする本研究会の意義は改めて大きいと思いました。それにもまして、森田先生という、佐藤学研究室で長年鍛えてきた方がアドバイザーとなって参加していただけること感謝の念でいっぱいです。

今回は新しく白鷹町から川田先生が参加してくれたり、久しぶりに顔をだしてくれた会員の方が多かったのもうれしい点でした。まずは、月 1 度粛々と続けていきたいと思います。

その後、駅前での魚民にも、駆けつけてくれた高橋欣さんも加わり、8名が森田先生を囲んで懇親会を持ちました。途中、丹さんから、本日天童三中で佐藤学先生が来校し、それを見に行ったことのメールが入りました。また、いつかその報告もしてもらいたいものです。

どんぐり倶楽部のホームページ

<http://www.donguriclub.com/>

たとえば、こんな課題

[methodNO10.files¥2mx00-99.pdf](#)

以前、NHK のクローズアップ現代という番組でも紹介されています。スタジオゲストは佐藤学先生でした。

その番組内容をご覧になりたい方はここをクリックしてください

[http://www.donguriclub.com/nhk\\_090618.html](http://www.donguriclub.com/nhk_090618.html)



[戻る](#)